

# 一人暮らし高齢者の幸福度に関する一考察

—子どもとの居住距離に注目して—

立 福 家 徳

## 1. はじめに

近年、高齢者を取り巻く社会環境は大きく変化をしており、その社会環境の変化は高齢者の家族のありよう、生活にも大きく影響を与えている。内閣府（2017）「平成29年高齢社会白書」によると、65歳以上高齢者の子供との同居率は、昭和55年（1980年）には、69.0%であったものが平成27年（2015年）には、39.0%と3割も減少している。また、その一方で、65歳以上の一人暮らし高齢者の人数を見てみると、男性は昭和55年の約19万人（4.3%）から平成27年には約192万人（13.3%）、女性は昭和55年の約69万人（11.2%）から平成27年には約400万人（21.1%）と顕著に増加している<sup>(1)</sup>。

このような状況を見ると、かつての祖父・祖母世代が、息子・娘夫婦、孫と一緒に暮らすというサザエさん一家に代表される3世代同居は今日の我が国において大きく減少しており、むしろ少数派となりつつあるといえる。その背景には、高齢単身者向け住居の増加、コンビニエンスストアの増加等の生活環境の整備や、非正規雇用の増加、生涯未婚率の上昇等による子ども世代の社会環境の変化による影響など様々な要因が考えられる。

また、一人暮らしは高齢者に限らず社会的孤立につながりやすいとされており、加齢による体力の減退等により活動範囲が限られる高齢

者はより孤立しやすい存在であると考えられる。実際に孤独死や万引き等の軽犯罪が高齢者の社会的孤立による問題としてメディアに取り上げられる機会も増加している。

しかし、高齢者のすべてが一人暮らしを望んでるわけでも、望んでいないわけでもないだろうし、一人暮らしであるからといってそのような状況にある高齢者の全てが社会的に孤立しているわけでもない。

そこで本研究では、一人暮らしの高齢者と子どもとの時間距離に注目する。その分析を通じて、どのような高齢者が幸福に一人暮らしを送っていて、どのような高齢者が逆に不幸になっているのかについて明らかにした上で、一人暮らし高齢者がより幸せに暮らすための方策について検討を行いたい。

## 2. 先行研究

経済学と幸福度との関係において、もっとも大きな影響を与えたのは、Easterlin (1974) が示した Easterlin Paradox<sup>(2)</sup> である。ここでは、国内の個人レベルデータを用いると幸福度と所得の間に正の相関関係が見られるものの、多国間の国別データを用いた場合には、一国の所得水準と国民の幸福度は必ずしも相関関係を持たないと証明された。その後の研究でも多国間の比較では所得水準と幸福度の間には強い相関関係が見られないことが Boarini et al. (2006) で報告されているが、国内の個人レベルデータでは、Frey and Stutzer (2002) など所得の効果が認められている。日本の個人レベルデータを用いた研究では、筒井ほか (2005) が一人当たり世帯所得と幸福度との間には正の相関が存在するが、所得が大きくなるほどその関係は弱くなることを示している。さらに、大竹 (2004) は所得に関する不平等感が、Oshio and Kobayashi (2010) は地域内の所得格差が幸福度に悪い影響を与えていることを示している。

その理由として、Hirsch (1976) で述べられているように、人々は周りの人との比較によって自分の社会的地位を確認しているため、所得

の絶対値よりも相対値の方がより影響を受けているためであると考えられている。つまり、国際比較であれば遠い他の国の人々が自分より豊かな生活をしていても気にならないが、国内では隣人が自分よりも豊かな生活をしていることはとても気になるということである。そう考えると、一人暮らしの高齢者にとっても所得水準は自分が周りと比べてどのような生活を送っているかという点から重要であると考えられる。

また、幸福度と大きな関係があることが示されている指標として健康状況があげられる。主観的健康感については松島ほか（2016）をはじめとして国内外の多くの先行研究が、幸福度との間に正の相関があることを示している。しかし、その因果関係の推定には注意が必要である。Veenhoven（2008）が指摘するように、幸福な人ほど健康を保つインセンティブは高くなるだろう。また、本研究のように高齢者を対象とした研究では健康な高齢者が調査に回答するというセレクション・バイアスの可能性も否定できない。そのため、健康については推計結果の考察について注意が必要となる。

幸福度の性差については、日本においても海外での研究と同様、総じて女性は幸福度が高いと言われている（大竹ほか（2010））。しかし、筒井ほか（2005）はその家庭内での責任や、喫煙習慣をコントロールすると性差は見られないとしており、単純な生物学的な違いが幸福度に影響を与えているわけではない可能性を指摘している。

さらに婚姻の与える影響については、内閣府（2009）によれば結婚をしており、子どもがいる人ほど幸せであるとされる。また、20歳から40歳代の女性を対象にしたパネルデータを用いた分析でも、配偶者を持つ女性は幸福であるという結果が報告されている（白石・白石2007）。しかし、結婚も離婚も幸福度を高めるという結果（佐野・大竹（2007））も報告されている。このことから、結婚が幸福度を高めるのと同時に、離婚は不幸な結婚生活からの解放という形で幸福度を高めている可能性がある。そのほかにも、死別など婚姻状況についてはそれぞれ

のイベントが幸福度に影響を与えている可能性が考えられる。

最後に、本研究で注目する加齢と子どもとの関係についてである。加齢について海外の研究では幸福度は40代前後が最も低くなるU字型になるとされている<sup>(3)</sup>が、日本では加齢は幸福度を下げることが報告されている(内閣府(2009)、筒井ほか(2005))。また、子どもとの関係については、Jeon et al. (2007)は韓国において一人で住むこと、あるいは多世代世帯で生活することは、夫婦のみで生活するよりも精神的健康を損なうリスクがより高いという結果を得ている。また、日本では原田ら(2005)で子どもと同居している女性は子どもがいない人に比べて生活満足度が高いという結果が得られている。

これまでの先行研究の議論を踏まえ、このあとの推計モデルでは性別、年齢、生涯未婚、世帯所得に加え、資産状況<sup>(4)</sup>を考慮して分析を行う。

### 3. データと推計モデル

本研究では、内閣府政策統括官(共生社会政策)付高齢社会対策担当が実施した「一人暮らし高齢者に関する意識調査、2014」の個票データを用いる。この調査は、「一人暮らし高齢者の生活上の心配ごとや困りごと等を始めとした意識、ニーズおよび地域における世代を超えた支え合いの現状について把握分析するとともに、今後の関係施策の推進に資すること」を目的として、2002年度調査に引き続いて、2014年12月4日から12月14日に実施されたものである。調査対象となったのは、全国から層化二段無作為抽出された65歳以上の一人暮らし男女2,624人であり、1,480人(有効回収率56.4%)から有効回答を得ている(注5)。この調査は高齢者の幸福度のみならず、高齢者の保有する資源や生活の状況を様々な側面から調査しており、きわめて有用なデータであると考えられる。

幸福度について、当該調査では「現在、あなたはどの程度幸せですか。『とても幸せ』を10点、『とても不幸』を0点とすると、何点くら

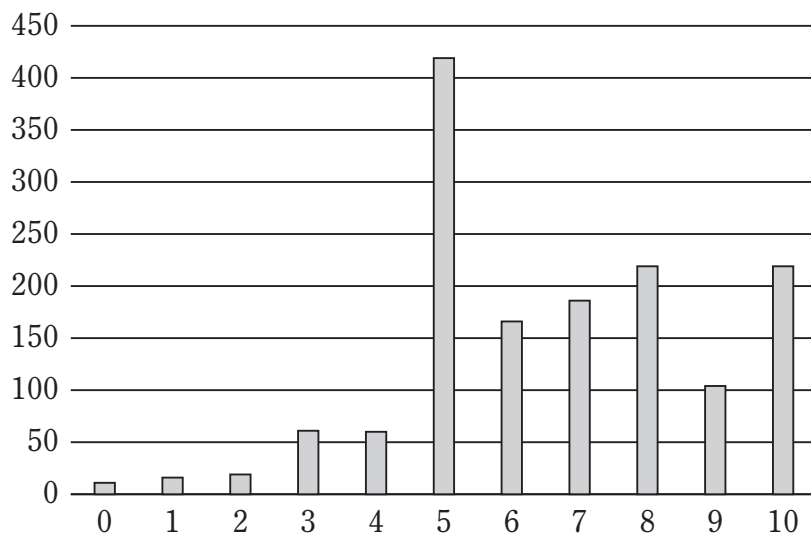


図1 幸福度の分布

いになると思いますか。」と質問している。回答者(1,480人)の幸福度の分布を見てみると(図1)、5点が最も多く、次いで8点の順になっている<sup>(6)</sup>。また、その平均値は、6.586、中央値は6となっている。全体的にとっても不幸と答えている対象者は少ないが、約3.1%が0～2を選んでおり「不幸」だと感じている人が一定数存在している。

本研究の目的は、一人暮らし高齢者の幸福度の決定要因を分析することで、一人暮らし高齢者がより幸せに暮らすための方策について検討を行うことである。被説明変数には、現在の幸福度(0:とても不幸～10:とても幸せ)を用いる。

まず、家族との関係についての指標として、近居親族の有無についての変数を用いた。具体的には、「あなたは現在、『(1) 親、(2) 子、(3) 孫、(4) 兄弟姉妹、(5) その他の親族』はいらっしゃいますか」という質問に「いる」場合には、「そのうちもっともよくお付き合いをされている方には、徒歩や電車、バス、車など、よく使う交通手段で、片道何分程度の距離にいらっしゃいますか。」という質問の回答、「(ア) 片道15分未満、(イ) 片道15分以上1時間未満、(ウ) 片道1時間以上」注7)のデータを「(2) 子」について利用した。なお、分析の際のベンチマークは「いない」場合である。

また、先行研究でその重要性が指摘されている健康については、「あなたの現在の身体的な健康状態はいかがですか。」という質問に「(ア) 良い、(イ) まあ良い、(ウ) 普通、(エ) あまり良くない、(オ) 良くない」のカテゴリーデータであり (ア) から順に 1 から 5 の値を割り当てている。

それに加えて対象の異質性を考慮するコントロール変数として、性別、年齢、生涯未婚、持ち家、世帯所得の個人属性に関する変数を分析に用いた。なお、所得については年金も含めた月額を「なし、3万円未満、3万円～5万円未満、5万円～10万円未満、10万円～15万円未満、15万円～20万円未満、20万円～30万円未満、30万円以上」で分けたカテゴリーデータであり、所得の低いほうから 0 から 7 までの値を割り当てている。

それぞれの変数についての記述統計量は表 1 に示すとおりである。サンプルサイズは、所得の無回答を除いた 1,428 となっている。

記述統計量について見ていくと、身体的な健康について平均値は 2.628 となっており、「まあ良い」と「普通」のあいだとなっている<sup>(8)</sup>。また、分析に用いた対象者は、約 3 分の 1 が男性であり、その平均年齢は約 75 歳、約 7 割の高齢者が持ち家に居住している。

表 1 記述統計量注<sup>(9)</sup>

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
幸福度	6.595	2.223	0	10
子との時間距離				
片道 15 分未満	0.250	0.433	0	1
片道 15 分から 1 時間未満	0.254	0.436	0	1
片道 1 時間以上	0.242	0.429	0	1
身体的な健康	2.628	1.190	1	5
個人属性				
性別 (男性ダミー)	0.331	0.471	0	1
年齢	75.031	6.685	65	99
生涯未婚ダミー	0.155	0.362	0	1
持ち家ダミー	0.716	0.451	0	1
世帯所得	4.261	1.322	0	7
地域特性				
大都市 (東京都区部、政令指定都市) ダミー	0.304	0.460	0	1
中都市 (人口 10 万人以上の市) ダミー	0.384	0.486	0	1
小都市 (人口 10 万人未満の市) ダミー	0.218	0.413	0	1

最後に、本研究で最も注目する子との時間距離について、片道15分未満の距離に子が住んでいるのは25%、片道1時間以内にするると半数以上の高齢者の子供が居住している状況となっている。

幸福度の決定に関する誘導形モデルを順序プロビットモデルで推定する。ここで、 $H_i^*$ は幸福度、 $rel_i$ は子との時間距離に関する変数、 $X_i$ はその他の説明変数のベクトル、 $u_i$ は誤差項である。ここで、幸福度( $H_i^*$ )は潜在変数となっており、データから実際に観察できるのは11段階(『とても幸せ』10点～『とても不幸』を0点)の順序尺度である。

$$H_i^* = \alpha + \beta rel_i + \gamma X_i + u_i \quad \dots (1)$$

$$H_i = \begin{cases} 0 & \text{if } H_i^* \leq \mu_0 \\ 1 & \text{if } \mu_0 < H_i^* \leq \mu_1 \\ & \vdots \\ 10 & \text{if } \mu_9 < H_i^* \end{cases}$$

#### 4. 推計結果

ここでは、被説明変数が(1)式に示すように11段階のカテゴリ変数であるため順序プロビット分析を行った。その推計結果は表2に示す通りである。

まず、子との時間距離が一人暮らし高齢者の幸福度に与える影響を確認する前に、どのような人々の幸福度が高いのかについて確認をしていきたい。身体的な健康については、主観的な健康状況が良い(カテゴリの数字が小さい)人の方がより幸福であるという先行研究と整合的な結果を得ることができた。

また、性別についても多くの先行研究と同じく、女性と比べて男性の方が不幸であるという結果を得られた。特に高齢者の一人暮らしの場合には配偶者と死別しているケースも多いと考えられる。その場合、女性よりも男性の方が抑うつ傾向になりやすいことはよく知られている。

表2 推計結果<sup>(10)</sup>

	係数	標準誤差
子との時間距離		
片道15分未満	0.218**	0.102
片道15分から1時間未満	0.122	0.100
片道1時間以上	0.043	0.100
身体的な健康	-0.258***	0.024
個人属性		
性別（男性ダミー）	-0.574***	0.062
年齢	0.018***	0.004
生涯未婚ダミー	0.002	0.107
持ち家ダミー	0.121*	0.065
世帯所得	0.145***	0.023
地域特性		
大都市（東京都区部、政令指定都市）ダミー	0.324***	0.105
中都市（人口10万人以上の市）ダミー	0.156	0.101
小都市（人口10万人未満の市）ダミー	0.200*	0.107
サンプルサイズ	1,428	
尤度比検定量	324.320***	
疑似決定係数	0.056	
対数尤度	-2714.247	

\*は10%水準、\*\*は5%水準、\*\*\*は1%水準で統計的に有意

現在の世帯所得やそれまでの所得の状況を反映すると考えられる持ち家についても、多くの先行研究と同じく幸福度を高めている。年齢については、より高齢である方が幸せを感じているという結果が得られた。本研究の対象者では年齢と幸福度の間には、U字型の関係があることが推察される。

引き続き、子との時間距離が一人暮らし高齢者の幸福度に与えた影響を見てみる。子どもが片道15分未満の距離にいる一人暮らしの高齢者は、子どもがいない高齢者と比べて有意水準1%で幸福度が高いという結果をえている。

その一方で、子どもが片道15分以上にいる一人暮らしの高齢者は、子どもがいない一人暮らしの高齢者と比べてその幸福度の間に、統計的に有意な差は見られなかった。

よく言われるように、子ども家族が「スープの冷めない距離」にいることは、高齢者の幸福につながっている可能性が推察される。その一方で、遠くにいる子どもが、子どもがいない場合と差がないという



結果も大変興味深い。

## 5. おわりに

本研究は、一人暮らし高齢者の子どもとの時間距離に注目をして、どのような高齢者が幸福に一人暮らしを送っていて、どのような高齢者が逆に不幸になっているのかについて明らかにすることを通じて、一人暮らし高齢者がより幸せに暮らすための方策について検討を行うことを目的としている。ここで、分析結果から得られた幸福な一人暮らし高齢者の条件について、改めて確認をしておきたい。

- 1) 子どもが片道15分未満の距離に住んでいること
- 2) 女性であること
- 3) 高齢であること
- 4) 健康であること
- 5) 持ち家であること
- 6) 所得が高いこと
- 7) 大都市に住んでいること

以上の7点が、高齢者が幸せに一人暮らしを送ることに影響を与えていると考えられる要因である。多くの要因が、社会的な介入が困難であることは明らかなので、特に本研究で注目した子どもとの距離について、幸福な「おひとり様」高齢者を増やすために政策的に、社会として何が必要かを考えてみたい。

一人暮らし高齢者の幸福度にとって、子どもが時間的に近くにいることが重要であるという結果からは、「いざ」というときに子どもがすぐ駆けつけることが出来る「安心」が重要であると理解できる。そのためには、子どもが親の近くにいられるような施策が重要であろう。つまり、日本のどの地域でも仕事があり、結婚・子育てができる環境を整備することは、よく言われる地域経済の発展とだけでなく、高齢者の幸福度の向上のためにも重要な政策メニューとなりうる。

最後に分析上の課題について述べておきたい。第一に、調査対象が

一人暮らし高齢者であることから、自ら望んで一人暮らしを行っている高齢者とそうでない高齢者との識別ができないという問題である。例えば、同居は避けたいが近くにいて欲しい高齢者のなかで、別居は叶っているが遠くにいる場合と、子ども世代の経済的理由等により同居している場合では、どちらが高齢者にとって望ましいのだろうか。つまり、一人暮らしによって得られる「自由」と、同居によって得られる「安心」との間でのトレード・オフをデータの制約上、残念ながら考慮できていない。

また、次に幸福度研究においては脱落変数についても課題として残される場合が多く、本研究でも残されている。もちろん、先行研究等で重要だとされている変数については、すべて分析に含んでいるが、特に高齢者の幸福度には現在のアンケート調査では十分に把握できない、幼少期の経済状況や健康状況、子との関係には、自身の親との関係が強く影響していることが考えられるが、それらは考慮されていない。加えて、分析に用いた時間距離について、その時間が短ければ（本研究の場合15分以内）、徒歩や電車、バス、車ではその時間の質的意味が異なっている可能性がある。これらの点については、新たな調査の実施も含めて今後の研究の課題としたい。

## 謝辞

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから〔「一人暮らし高齢者に関する意識調査、2014」(内閣府政策統括官(共生社会政策)付高齢社会対策担当)〕の個票データの提供を受けました。

また、匿名のレフェリーから多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。なお、本稿における誤りはすべて筆者に帰するものである。

## ——注——

- (1) 括弧内は、高齢者人口に占める割合。
- (2) Eastelin Paradox は「幸福のパラドックス」とも呼ばれる。
- (3) Becchetti et al. (2009) では、ドイツで確認される U 字型は退職後に自由な時間が増加することが幸福度を押し上げているのではないかと指摘している。
- (4) 高齢者においては、それまでの経済状況から資産状況についても考慮する必要があると考えられるため、分析に加える。
- (5) 調査方法は、調査員による個別面接聴取法である。
- (6) 幸福度の分布については、「平成 23 年度国民生活選好度調査」をはじめとする、同様の選択肢を持つ過去の政府統計等を見ても 5 点が最も多く、次いで 8 点が多くなるという結果が出ており、それらの調査と整合的である。
- (7) 「平成 28 年度社会生活基本調査」によると 1 日の平均通勤時間が 1 時間 19 分であることから、1 時間以内は通勤圏と同等の距離であるとみなすことが出来る。
- (8) これは、健康ではないと調査に対応できないというセレクション・バイアスが存在するため、一般的な一人暮らし高齢者よりも健康状態が良好となっている可能性が高い。
- (9) なお、都市の規模も一人暮らしに影響する可能性もあるため、地域特性として都市規模のダミー変数も作成した。
- (10) 幸福度について「0 (とても不幸) ~ 5」を 0、「6 ~ 10 (とても幸せ)」を 1 とした時ときの 2 値変数のプロビット分析の結果については、補分析を参照のこと。補分析の結果からは、今回得られた結果が安定的なものであることが考察される。

## 参考文献

- Becchetti Leonardo, Ricca G. Elena and Pelloni Alessandra (2009) “The 60s Turnaround as a Test on the Causal Relationship between Sociability and Happiness” SOE Papers on Multidisciplinary Panel Data Research.
- Boarini, R., A. Johansson and M. Mira d’Ercole (2006) “Alternative Measures of Well-being,” OECD Economics Department Working Paper, No. 476.
- Easterlin, R. (1974) ‘Does Economic Growth Improve the Human Lot?’ in P.A. David and M.W. Reder, (eds). Nations and Households on Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz, New York: Academic Press, Inc.
- Frey, B. S. and A. Stutzer (2002) Happiness and Economics, How the Economy and Institutions Affect Well-Being, Princeton: Princeton University Press.
- 原田謙・杉澤秀博・浅川達人・斎藤民 (2005) 「大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康」『社会学評論』55 (4), pp.434-448.

- Hirsch, F. (1976) *Social Limits of Growth*, Cambridge University Press, Cambridge, MA.
- Jeon, G. Jang, S. Rhee, S. Kawachi, I. and Cho, S. (2007) “Gender Differences in Correlates of Mental Health Among Elderly Koreans” *The Journals of Gerontology: Series B*, 62 (5), pp.323-329.
- 松島みどり・立福家徳・伊角彩・山内直人 (2016) 「現在の幸福度と将来への希望」『日本経済研究』No.73 (1), pp. 31-56.
- 内閣府 (2009) 『平成 20 年版国民生活白書』内閣府.
- 内閣府 (2012) 『平成 23 年度国民生活選好度調査』内閣府.
- 内閣府 (2017) 『平成 29 年高齢社会白書』内閣府.
- 大竹文雄 (2004) 「失業と幸福度」『日本労働研究雑誌』No. 528/July 2004, pp.59-68.
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎 (2010) 『日本の幸福度 格差・労働・家族』東京、日本評論社.
- Oshio, T. and M. Kobayashi (2010) “Area-Level Income Inequality and Individual Happiness: Evidence from Japan”, *Journal of Happiness Studies*, 12 (4), pp 633-649.
- 佐野晋平・大竹文雄 (2007) 「労働と幸福度」『日本労働研究雑誌』No. 588/ July 2007, pp.4-18.
- 白石小百合・白石賢 (2007) 「少子化社会におけるワーク・ライフ・バランスと幸福度－非線形パネルによる推定－」ESRI ディスカッションペーパー . No.181.
- 総務省 (2017) 『平成 28 年社会生活基本調査』総務省.
- 筒井義郎・大竹文雄・池田新介 (2005) 「なぜあなたは不幸なのか」ISER ディスカッションペーパー . No.630.
- Veenhoven, R (2008) “Healthy happiness: Effects of happiness on physical health and the consequences for preventive health care,” *Journal of Happiness Studies*, 9, pp.449-469.

【補表】 幸福度の度数表（サンプルサイズ：1,480）

幸福度	度数	割合（％）	累積（％）
0 とても不幸	11	0.74	0.74
1	16	1.08	1.82
2	19	1.28	3.11
3	61	4.12	7.23
4	60	4.05	11.28
5	419	28.31	39.59
6	166	11.22	50.81
7	186	12.57	63.38
8	219	14.8	78.18
9	104	7.03	85.2
10 とても幸せ	219	14.8	100

## 【補分析】

幸福度について「0（とても不幸）～5」を0、「6～10（とても幸せ）」を1とした時ときの2値変数のプロビット分析の結果

	係数	標準誤差
子との 片道15分未満	0.235*	0.130
時間距離 片道15分から1時間未満	0.177	0.128
片道1時間以上	0.107	0.128
身体的な健康	-0.263***	0.031
個人属性 性別（男性ダミー）	-0.673***	0.079
年齢	0.015***	0.006
生涯未婚ダミー	0.154	0.138
持ち家ダミー	0.178**	0.082
世帯所得	0.147***	0.029
地域特性 大都市（東京都区部、政令指定都市）ダミー	0.276**	0.133
中都市（人口10万人以上の市）ダミー	0.168	0.127
小都市（人口10万人未満の市）ダミー	0.247*	0.136
サンプルサイズ	1,428	
尤度比検定量	226.290***	
疑似決定係数	0.118	
対数尤度	-845.345	

\*は10%水準、\*\*は5%水準、\*\*\*は1%水準で統計的に有意